

目 次

	グラビア			
	発刊に際して			1
	計画から出発まで	大	嶽	2
記	録			
	ニューデリーの一週間	大	嶽	6
	ニューデリーからマナリへ	増	子	7
	山麓への旅	那	須	17
	ピーク6109 揖の試登	井	口	20
	ファブラン	増子・井	口	33
	シリ・バルバット登頂	大	嶽	42
	撤 収	井	口	46
	行程表			49
	行程表			51
	ニューデリー一人ぼっち	大	嶽	53
	行動概要			59
報	告			64
	装 備	那	須	65
	食 糧	増	子	74
	気 象	井	口	83
	医 療	井	口	87
	地形測量と地図作成	井	口	91
	会 計	大	嶽	96
	協力者名簿			106

資	料		108	
	カシミール及びヒマチャル州			
	登山探検年表	井	□	109
	文献目録	井	□	133
	宵 類			147
	現地価格表			158
附	録			160
	ヒマラヤ通信			161
	インド雑感	大嶽・井口		170
	スケッチ			175
	あとがき			179

発 刊 に 際 し て

言い古された言葉ながら、未知への憧れと、ヒマラヤへの情熱のほとばしりが凝縮して遠征隊というものを作り上げる。そして、その一つの帰結として当然のように報告書があり、いままでのあらゆる試行がそこに収束される。

事務的には一つの仕事の集約であり、成果である。

しかし我々当事者には、報告書はそれ以上の意味を持つように感じられる。

3年以上の歳月は我々に何を待たらしたのだろうか。

この活字にどれだけの我々の感情をたくすことができたろうか。乏しい表現力に加えてハラハラするばかりである。

ただ言えることは経験のとぼしい我々に、いままでのことは暗夜をさまようごとくすべてが”試行”であったということである。だから今回のインド行は一つの節であっても終りではない。この思考の上に立ってさらに山岳部と共にさらに一段高い試行をくり返して行くことになるだろう。そんな意味でこの報告書は我々の山への志の一里塚であり、中間報告とでも言えるものである。

この報告書の発刊に際して留意したことは、協力いただいた個人、団体の方々へのその成果の報告はもちろんとして、今後の資料としての使用に耐えるもの、ということをもまず第一に考えた。後へ続く人々へ資するところがあれば幸いである。

どこまでそれが紙面に表わせたかは心配であるが、それなりの努力はしてみたつもりである。多くの人々のご批判を仰ぎたいと思う。

終りに当って、本登山隊を出すに当りご協力いただいた団体、個人及び大学関係各位へ深甚の謝意を表します。

**東京電機大学二部山岳部
ヒマラヤ遠征隊**

計画から出発まで

大 嶽 藤 一

そもそも我々がヒマラヤ風邪にうなされ始めたのは、今から5年前のことであった。その頃は、個人個人が若き情熱を傾けた山の一つの頂点として、夢に描き、憧れとして捉えていた。しかしその夢がやがて大きく脹み、漠然とではあるが実現へと向かっていった時、一つの組織だった行動の必要にせまられ、ヒマラヤ研究会なるものが山岳部を中心として出来たのは当然の成り行きであったのだろう。このヒマラヤ研究会は丁度ネパール解禁の発表された8月にその結成を見た。だがこの会は実行段階の組織ではなく、その名が示す様に研究的な組織であった。そして何ヶ月かの月日が流れていったが、その調査は思った程の進展を見せなかった。それはこの時点で、やはりヒマラヤ遠征が遠くの目標として我々の心にあったが故でもあり、食糧、装備といった基礎調査は目標の山を絞らない限り、膨大な量に達する。これらのことから、ややマンネリズムに陥った状態から抜け出す為の手段として、目標の山を定め、我々の経済状態をあえて無視してヒマラヤ遠征計画を立てることにした。兎も角ヒマラヤへ行くのだという意識を持ち、その計画を立案することになったのである。そして選ばれた山が、カンジロバであった。この時点では未踏峰であり、何よりも殆ど踏査さえされていない処女地であった。これが我々の心を大きく捉えその後の調査活動は順調に進み、計画が出来上がっていった。だがこれ程の山を他のパーティが見逃す筈もなく69年5月岩友会により、カンジロバ南峰が(主峰からは大部隔っているが、)そして同じ年の11月大阪市大により主峰が登頂された。それは我々が考えていた様に長いキャラバンと5400mのコルの突破により成された。

この時の素直な感情は「やはりやられてしまったか」と皆が思っていた。それはあくまで机上のプランであり、経済的状态を無視したものではあったが、我々の心を大きく捉え、我々の夢であったことも事実であった。やはり岳人としてヒマラヤを目指す以上、処女峰への憧れがあることは否めない。目標の山の変更は、既登峰になってしまった事が、唯一の理由ではなかったが大きな要因であった。

そして又、空白の時間があつた。この間に何もしなかつた訳ではなかつた。ある者はワハンを調べ、又ある者はヒンズーラジ、ヒンズークシュを調べ、そしてパンジャブを調べる者もあつた。しかし目標の山を見出すにはそれだけの時間が必要であつた。や

がてそれは一つの方向に収束し、具体化していった計画がヒンズー・ラジのシャヤーズ峰登頂計画であった。この間に同じヒンズー・ラジのガルムツシュへの計画もあったが、これは71年2月のヒンズー・クシュ会議に出席した者の得た情報では不許可になる公算が大きかった。チアンタール氷河の最奥に位置するガルムツシュは今だに、未踏査の地域であり、大きな魅力となっているが、やはり許可の可能性がないとすれば、我々は諦めざるを得なかった。

しかしシャヤーズモヤルフーン山塊では最高峰であり、高度こそ6000mをわずかに上まわる程であるが、まだ未踏に近かった。シャヤーズ峰の写真を見出した時は、どれがシャヤーズかと皆で夜遅くまで議論したのを思い出す。そしてこの時点でヒマラヤ研究会を発展的解消させ、正式な実行委員会を発足させた。これは今までの調査で我々の経済状態でも実行に移すことが可能だと知ったからである。もちろん寄付を仰がなければならないが、何んとか実行出来得るであろう。そんな自信が芽ばえていた。最早ヒマラヤは夢ではなく、我々の目前にどっしりと構えていた。

だが実行段階に移すと同時に我々はメンバー選考を行わなければならなかった。ヒマラヤを夢見、調査活動をして来た仲間は9人であった。しかし我々が実際にヒマラヤ遠征を行なうとすれば、経済状態やチームワークから4~5人が限度であった。皆これまで苦勞を供にした友であった。何んと非常なことが、その友の何人かは、今回のヒマラヤへは行けなくなる。しかし我々は何んらかの方法でメンバーを選ばねばならない。この耐え切れぬ葛藤に耐えぬばならなかった。……

ともかく5人のメンバーが決定されたのは4月13日であった。この間パキスタン内乱があり新聞等に登山禁止のニュースが流れたが、パキスタン大使館は未確認であるとの解答から、我々は事態を見守りながら登山申請を行なうことにした。又一方では大学その他の団体の後援等の組織作りが着々と進んでいった。詳細な予算が生まれ、それと同時に寄付関係の援助依頼としだいに骨格ができていった。10月21日にパキスタン大使館に正式計画書を提出するまでの間、日本山岳協会の推薦状はもちろん、実行委員会を中心とした行動は次第に実を結び、具体的な検討事項もほぼ終りに近づいていた。

この間パキスタン状況は落ち着きを取り戻していた様に見えていたが、ここで思わぬ事態が持ち上がった。ついに12月5日印パ戦争が勃発した。パキスタン大使館は我々の問いに答えられる筈もなく登山界の大かたの見方がそうであった様に、我々も72年の遠征は極めて難しい状態であるとの判断から、すぐにワハン、その他の地域の調査を再び開始した。年が明けると印パ戦争も静まり、次第に平静に戻りつつあった

が、やはり73年2月パキスタン入国の全ての登山隊に「今年度は非常事態故」との理由に依り不許可通知が舞い込んでいた。しかしこの時の我々のヒマラヤへの情熱はすでに消し難い勢いで燃え上っていた。確かに実行委員会内部にも来年同じシャヤーズを狙うべきであるという意見もあったことも事実であったが、今この情熱をぶつけたい、この時期を逃してはという意見もあり、結局我々は今年実行と決定した。

すでに調べているワハンは、アフガニスタンの登山規則により、医者を同行せねばならなかったし、何より、その規制区域外の登山可能な山で魅力的な山が見い出せなかった。そして我々はパンジャブへと移行した（これは現在ヒマチャール・ブラデッシュ・ヒマラヤと呼ぶべきだが）ここはインドラサンやディオティバ等毎年数隊もの登山隊を迎えている山もあるが、ロータンパスを越えたラホール・スピティの山々、或いはトス・ナラ以東等、未登の地域であり、天候も比較的安定している。我々は再び目標の山を見い出すことに専念した。そして多くの外国文献を調べても、ディビボクリ氷河には殆ど人が入っていなかった。バラシグリ等も魅力的な山であったが、これは70年のメントーサへ向った慶応大隊が、日本に於いてこの山の許可を得ながら、インドに入国してからインド側のミスで許可が出たものと分り、メントーサへの変更を予儀なくされている山である。やはりこれは現在でも同じであると考えの方が正しいと我々は思った。と同時にメントーサが許可されるとすれば、その周辺も調べておく必要があった。この他カシミールのシクルムーン周辺も魅力的ではあったが、ここは御承知の様に以前からパキスタンとの間にカシミール紛争が続いている地域である。印パ戦争後だけに状況が悪化していると思われ、入山の可能性は疑わしい。

そして我々は第一目標をディビボクリ氷河のアイスセールとし、現地交渉の対称としてメントーサ周辺の山々やシャカルベ等もリストアップしておいた。5月インド大使館を通し計画書を提出した。しかしこれは後でニューデリー通信で触れている様に我々のパスポートにビザ申請中の印が押され本国の返事がない限りビザが発行されない様になってしまった。

だが、多くの屈折の後ではあったが出発まで寝る暇も無いにしさの中で多くの人々の協力の内に着々と出発準備が整っていった。



सत्यमेव जयते

アッシューカ・ピラーの頭頂部
インドのシンボルマークでもある。